

2023 年度

2/2 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、問題冊子に受験番号・氏名を記入します。
次に、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は45分です。
4. 問題は、1ページから16ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の8割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受 験 番 号	氏 名
B	

① 次の1〜8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 日差しの強さにセイカのおとずれを実感する。

2 それはきつとタヌキのシ業わぎにちがいない。

3 海外から要人をマネク。

4 腹痛でガンヤクを飲む。

5 「待てばカイロの日和ひよあり」というから、あせらずにしよう。

6 関取は朝早くけいこを始める。

7 料理長直伝のレシピで肉料理をふるまう。

8 考えごとをしていたので、つい生返事なまかえじとなっていました。

② 次の文章は学級会の会話の様子です。これを参考に、後の問いに答えなさい。

議 長…「六年生を送る会」で、私たち五組は何をやるか、という議題について、合唱、劇、朗読、という案が出ました。ほかにありますか。

参加者…ありません。

議 長…それでは、多数決をとります。よいと思うものを一つ選び、手を挙げてください。

合唱がいい人は手を挙げてください。劇がいい人は手を挙げてください。朗読がいい人は手を挙げてください。① 多数決の結果、一番多かったのは合唱でした。何か意見はありますか。

共子さん…合唱は、他のクラスも選びそうなので、② 六年生の印象にはあまり残らなくなってしまうと思います。だから、私は合唱はやらないほうがいいと思います。

議 長…他の人はどうですか。

立子さん…確かに、せっかくなら他のクラスがやらないようなもののほうが、六年生の思い出に残ると思います。

議 長…他に何か意見はありますか。

愛子さん…③ 劇はとても楽しそうですが、きゃくほん脚本やぶたいそうち舞台装置など、準備の期間があまりないので、間に合うか心配です。合唱だったら、今から練習すれば、よいものを届けられると思います。

議 長…そうですね。④ 曲が同じにならないようにすれば、問題はないと思います。では、多数決のとおり、合唱に決めましょう。次に、代表のことはを言う人を決めようと思います。

千代さん…え、待って。⑤ それよりも、先に曲を決めるほうがいいと思います。

議 長…それもそうですね。それでは、何か歌いたい曲がある人は手を挙げてください。

(以下略)

問 ――線①～⑤について説明した次のA～Eの文の中で、学級会の進め方として正しいものには「ア」を、正しくないものには「イ」を、それぞれ記号で書きなさい。

- A ①のように多数決を取った後ではなく、取る前にいろいろな意見をきいたほうがよい。
- B みんなで話し合う場であるので、②のような否定的な意見を言っってはいけない。
- C 話し合いの時間が長くなってしまったので、③のような主張は説明をふくまずに、一言ですませたほうがよい。
- D 話し合いが手ぎわよく進むことが大切なので、④のように議長が自分の意見を中心にしてまとめていくのがよい。
- E 話し合う内容とその順序を、⑤のような発言が出る前に議長と参加者として確かめながら進めるのがよい。

共子と立子による鑑賞

共子..お庭の絵を語り手はながめているのね。モデル
となったお庭は、語り手もよく知っているお庭
なんだわ。

立子..その絵が「裏庭」という題名らしいけれど、①「裏
庭」って、「表の庭」とどっちがうのかしら。

共子..絵には、秋のお庭の様子が描かれているらしい
けれど、詩の中では表現が②法で描かれて
いて、それは詩の語り手自身の知らない様子だっ
たんだわ。

立子..語り手が見ていた季節と、別の季節の庭の様子
が描かれていたからだと思うわ。もし、太陽が
明るく照りつける夏の、思い切り水遊びをした
庭と③この「裏庭」の様子を比較してみたら、はっ
とするかもしれないもの。

共子..そうすると、第二連で述べている「誰か」は、
④だと、考えていいのではないかし
ら。でも、それなら、最後の「椅子ひとつ」と
いうのは、⑤誰の椅子で、何のために置かれてい
るのでしょうかね。

4 ④ に入ることはととしてふさわしいものを次の中から一つ選

び、記号で書きなさい。

ア 詩の語り手

イ 庭のある家の主人

ウ 裏庭の絵を描いた人

エ 虫たち

オ 子どもたち

5 線⑤「誰の椅子で、何のために置かれているのでしょうかね」とあり
ますが、これについて述べた文としてふさわしいものを次の中から二つ
選び、記号で書きなさい。

ア この「裏庭」は特定の人のための場所ではなく、どんな人でもむか
えてくれるということを表している。

イ この庭の持ち主が座るための椅子で、庭の持ち主のさびしく孤独な
気持ちを表現するものである。

ウ この「裏庭」で過ごす人のためのもので、見る人をこの空間の中に
入りこませるしかけである。

エ この「裏庭」には決して誰も触れられないことを表し、人間をこば
む秘密の空間を演出している。

オ この絵を描いた人間が座っている椅子のことで、この椅子から庭を
ながめる自分の存在を主張している。

④ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

九月の運動会。二年C組の男子の中で一番足が速かった椎太と、女子で二番目に足が速かった私は、ともに男女混成クラス対抗リレーの走者として選ばれたのだった。

おなじ学年のA組からD組まで、各クラス四人の代表が対決するリレーは運動会の華だ。中学生にもなると赤が勝とうが白が勝とうがもはやどうでもよくなるが、よそのクラスとの対抗戦では負けたくない。とりわけ負けず嫌いの椎太は燃えていた。

「死んでも勝つー！」

運動会の数日前、放課後のグラウンドで行われたリレーのリハーサルでも椎太はほかのだれより張りきっていた。バトンタッチの練習だけでは飽きたらず、何度もコースを全力疾走し、そして、何度も転んだ。

「あいつ、またコケた」

「何やってんだろ」

たびかさなる転倒に皆があきれはじめの中、私は走っては転び、走っては転びしている椎太をいつも増してまじまじと見つめ、あることに気がついた。

「椎太」

その発見を伝えるため、校庭の水道でひぎの血を洗っていた椎太に近づいた。

「カーブを曲がるときは、スピードを落とさなきゃ。全力のまま突っこんでいたら、そりゃだれだって転ぶよ」

当然の助言を口にした私に、椎太はいつになくけわしいまなざしを返した。

「ヤだ」

「え」

「スピードを落とすとか、ヤだ。俺は、全力でカーブに突っこんで、全力のまま曲がってみせたい」

「……なんて？」

「決めたんだ。今回のリレーはただ勝つだけじゃなく、遠心力との勝負にも勝つ。完全勝利だ。ぜったい決めてみせっから、見てて」

バカだ、と私は冷静に思った。そのバカさ加減が愛おしくて、それ以上、まっとうな道理を説く気にもなれなかった。

結局、椎太はその後も ② に遠心力と戦い続け、負け戦のまま練習を終えた。あげく、不安を隠せないC組のリレーメンバーにけろりと言いつつ放った。

「大丈夫、本番はきつとうまくいくって」

練習で一度もうまくいかなかったことが本番でうまくいくわけがない。このときばかりは椎太が好きなマンガの主人公たちを呪った。彼らが根拠もなしに精神力だけでピンチを乗りこえずすぎるから、椎太は火事場のバカ力を信じすぎているのだ。

どうしよう。このままじゃ椎太のせいでC組が負けてしまう。運動会が近づくほどに、私の胸騒ぎは高まった。

C組のリレーメンバーは強者ぞろいだから、椎太さえまともに走れば楽勝できるはずなのだ。第一走者の朝香は陸上部のエース。地区大会で優勝したこともある彼女は、まずまちがいないダントツのトップでバトンをつなぐだろう。第二走者のなべっちも椎太と張るほどの駿足だから、きつとリードを保った

まま第三走者の私のもとへ来る。私さえそのリードを守れば、アンカーの椎太は一位でバトンをにぎることになる。

二年C組のみんなはさぞや湧きあがることだろう。学年一の駿足をほこるサッカー部の注₁一ホープがぬかされるわけがない。もはや勝ちが決まった。だれもがそう確信し、小躍りしながら声援を響かせるだろう。

が、勝利の瞬間はおとずれない。椎太の前には遠心力という名のラスボスが立ちはだかるのだ。

よもやの敗北。期待を裏切られたみんなの落胆が、椎太への怒りに変わったらどうしよう。椎太が責められたらどうしよう。嫌われたらどうしよう。どうしよう、どうしよう……と日々

注₂憂悶しつづけた私は、ついにある日、打開策をひらめいた。③最悪の事態を避ける唯一の方法。

それを実践したのは運動会の当日だ。

「石にかぶりついても勝つー！」

応援席の声がにわかにヒートアップするクラス対抗リレー。その決戦に先がけて各配置へと散っていく直前、椎太はリレーメンバーに向かってこぶしを高々とつきあげてみせた。その鼻息の荒い後ろ姿を呼びとめ、私は自分の決意を伝えた。

「椎太。私も決めたよ」

「ん？」

「私も遠心力と戦う。見ててね」

何か言いたげに口をばくさせる椎太と別れた数分後、ついにリレーの幕が切って落とされた。

想定どおり、朝香はスタートダッシュから他を引きはなし、なべつちもぶつちぎりの一位のまま私のもとまで来た。バトンを継いだ私はふしぎと静かな心で④に出た。遠心力と

の勝負。それは自分との闘いでもあった。実際にトラックで風を切っていると、スピードをゆるめずにカーブへ突っこむのはものすごくこわい。本能的に足がひるむ。その本能を勇気で超越しなきゃいけない。勇氣。勇氣。勇氣。そう自分を奮わせ、むしろ加速をつけて遠心力に挑んだ。そして、転んだ——というよりは、飛んだ。

一瞬、ふわっと体が軽くなり、直後に衝撃が襲った。ひざを、ひじを、顔を、順に体を打ちつけながら、私は土の上に沈んだ。そのぶざまな屍を後続の走者たちがつきつきと越えていく。彼らの足音が遠ざかってからようやく体を起こすと、立ちのぼる砂煙ごしに呆然とたたずむ椎太の姿が見えた。

ずきずき痛む足を鞭打って起きあがり、私がふたたび走り出したのは、どうしてもバトンを渡したかったからだ。

「最後までがんばれ」

「ナイスファイト」

かわいそうな子に送られる声援をあげながら、やっとの思いでバトンを託した瞬間、椎太の雄叫びが蒼い秋空を衝いた。

「おまえのカタキは俺が討つー！」

その十数秒後に椎太も飛んだ。

終わった——。

くやしそうな椎太は見たくないし、C組のみんなに合わせる顔もない。へべれけのよっぱらいみたいな千鳥足の椎太がゴールを切るのを見届けたあと、私は心配そうに駆けてきたヒグチに「保健室で寝てくる」と言いのこし、すみやかに運動会から退場した。頭の前からつま先まで、体の中には注₃虚脱感しかなかった。保健室で流血した手足の手当てをしてもらっているあいだも、グラウンドの注₄喧騒をはるか遠くに感じていた。

「先生。ちょっとクラクラするんで、⑤ 一時間だけ寝かせてください」

「貧血？ いいわよ、休んで行きなさい」

保健室のベッドに横たわると、妙にほっとして、急に眠くなつた。そういえば、前夜は遠心力との対決をシミュレーションしすぎて満足に眠れていなかった。

またたく間に私は眠りに落ちた。

目覚めると、ベッドのわきに椎太がいた。

最初は夢かと思った。よく見る定番の夢。それにしてはリアルだ。汗と埃が混じったような匂いもする。もしかして……

「椎太？」

本物と気づくなり、ぎよっとして飛びおきた。

「なんているの？」

椎太はにまっと笑って片手を上げた。そのひじには私のひじにあるのと同じガゼがある。

「おそろいだ」

「あ」

「競技ぜんぶ終わったんで、消毒しに来たんだよ。坂下がここにいてヒグチが言ってたし」

さぞくやしがついていると思いきや、椎太の口調は案外さはさばしている。

「おまえ、派手にコケてたけど、大丈夫か」

「あ……うん。すりむいたただけだから、大丈夫。椎太も威勢よかったね」

「ああ、見事な共倒れだな。けど、ま、なかなかの名勝負だったよな」

「へ」

「おまえのカタキは討てなかったけど、やるだけやって、俺、なんか気がすんだ。やっぱ大したもんだな、⑥ ってやつは。敵ながらあっぱれだ。な？」

「んー。でも、クラスのみんなは？ 怒ってなかった？」

「ぜんぜん。すげー珍場面を二回も見れたって、楽しそうだったよ」

たちまち胸が軽くなり、私はほうっと息をついた。

「よかったあ」

⑦ 俺もさ、楽しかったって言ったたらアレだけど、おまえがパワー全開でカーブに突っこんでったとき、なんていうか……」

頭をかきながら長いこと言葉を探し、椎太はついにそれを見つけたって顔をした。

「感動した」

「え……」

「俺よりアホがいたって、マジ感動した。ありがとな、坂下」
感動のポイントはよくわからなかったものの、最後の「ありがとな」には本気の心がこもっていて、私はそれに感動した。

おそろいのガゼが急に大事な勳章に思えて、あやうく涙が出そうになる。椎太に感動された。椎太にほめられた。椎太にありがとうって言われた。

「じゃ、俺、閉会式に出てくつから」

椎太が保健室を去ったあとも、胸の震えは鎮まるところかどんどんマグニチュードを上げていった。

(森 絵都「ヒカリノタネ」『はじめての』水鏡社による)

- 注1 ホープ ㊦ 将来を期待されている人
注2 憂悶 ㊦ 思いなやみ苦しむこと
注3 虚脱感 ㊦ ぼんやりとして何も思いつかない感じ
注4 喧騒 ㊦ 物音や人声がうるさく、さわがしいさま

1 —— 線① 「あることに気がついた」とありますが、「私」が「気がついた」こととはどのようなことですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 椎太が放課後のグラウンドで行われていたリレーのリハーサルで、誰よりも張りきっていたこと
イ 負けず嫌いの椎太はよそのクラスとの対抗戦では絶対に負けたくないと燃えていたこと
ウ 椎太が度重なる転倒の後もスピードを落とさず、カーブに全力のまま突っ込んでいること
エ 椎太さえまともに走ってくれば、C組はリレーでは勝ったも同然であること
オ 椎太が本番でも全力でカーブに突っ込んで、全力のまま曲がってみせたいと考えていること

2 [] ② に入ることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア したりげ イ おおっぱら ウ しどろもどろ エ しゃかりき オ ざっくばらん

3 —— 線③ 「最悪の事態を避ける唯一の方法。」とありますが、どのようなものですか。「最悪の事態」を具体的に説明しながら、次の()
にあてはまるように、四十五字以内で書きなさい。

() 四十五字以内

() もの

(下書き用)

		36			
もの					

4 ④ に入る四字熟語としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 因果応報

イ 有言実行

ウ 本末転倒

エ 傍若無人

オ 我田引水

5 —線⑤—「一時間だけ寝かせてください」とありますが、「私」が「一時間だけ寝かせてください」と言ったのはなぜですか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア すりむいた体中がずきずき痛み、いまから起き上がって運動会にもどれそうにはなかったから

イ 勝てなかった椎太を目にしたくないうえに、期待していた友だちにも申し訳ないと思ったから

ウ 自分のせいで椎太の大切な晴れ舞台を台無しにしてしまったことを気に病んでいたから

エ 運動会の前の夜から、どうやってカーブで転んだらいいかを考えていて十分に眠れていなかったから

オ 椎太に恥ずかしいところを見せてしまったし、今日はもういっしょに帰りたくなかったから

6 ⑥ に入ることばを、文章中から漢字三字で書きぬきなさい。

7 —線⑦—「俺もさ、楽しかったって言ったらアレだけど」とありますが、ここには椎太のどのような思いが表現されていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自身の無茶な試みでクラスのみんなに迷惑をかけたことをあやまりたいという思い

イ 運動会本番で「私」に先を越されて転ばれてしまったことがぐちゃしいという思い

ウ 自分と同じように挑戦してくれた「私」に、感謝を伝えたいという思い

エ せっかく見に来てもらった家族に申し訳ないことをしてしまったという思い

オ リレーでの勝負に勝てなかったことを心底がっかりしているという思い

5 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

戦後、科学によって国家の再建をしようとしてよくいわれたが、いったい、科学が進歩したらこの日本の国が再建されるであろうか。再建という意味は、再び強大な軍備をもって、他国を侵略して物資を持ってくるという意味ではない。現在の日本の国で現在の数の日本人が安楽に生きていけるという意味である。

それにはなんととっても、日本の国から生産されるもので、日本人が生きていくことを考えねばならない。もっともこれは広い意味であって、貿易を入れての話である。戦前でもだいたい前から、すなわち昭和のはじめごろから、日本の本土では食糧が足りなくて、主として朝鮮と台湾とから毎年約一二〇〇万石の米を輸入していた。食糧に次ぐ大切な資源である木材は、サガレン(樺太)に依存するところが非常に多かった。そういうものを、急に現在の日本の国内だけの増産によってまかなうことはできない。それで輸入しなければならぬのであるが、輸入にはそれに相応するだけの物資を輸出する必要がある。千円札を富士山ほど積んでも、外国からはなにも買えない。買えるとしても、紙としてのねうちだけにしか通用しない。それで輸入するものも、国内で生産したものが形を変えただけである。結局われわれは、この国土の中で生産されるものだけにたよらなければならぬ。もっともこの生産の中には、農産・林産・水産・鉱物資源など、直接にこの国土から生産されるもののほかに、原料を外国から輸入して製品を輸出し、その手間賃として製品の一部を取ること一つのプロダクションとして含まれている。

いずれにしても、それらの生産をあげるためには、国の中にそれだけの資源がなくてはならない。科学の力によっても、無から有を生むことはできない。それで①問題は、それだけの資源があるか否かに帰する。ところで②従来の考え方は、日本は資源に乏しい国ということになっていた。近代文明の基礎をなす鉄も石炭も足りない。石油にいたっては、必要量の十分の一も自国では生産しない。鉄以外のいろいろな金属も、銅と亜鉛ぐらゐがかるうじてまにあう程度で、あとのものは著しく足りない。食糧も足りないないし、木材資源も年々に食いつぶされている。まことに悲観的な見通しであった。そして、結局この本土だけでは、人口をまかないきれないというので大陸に進出し、その結果が今度の戦争になり、そして今日のような状態になってしまったわけである。しかし、日本の国は資源に乏しいという考えは、明らかにまちがっている。日本は決して資源に乏しい国ではない。水資源にしても、水産資源にしても、森林資源にしても、世界各国の平均からみたらかえって多いくらいである。

日本の国が水に恵まれていることは、今日ではすでに常識になっている。水産も世界三大漁場の一つを近くにもっている。森林資源は世界的にも乏しいもので、日本ぐらゐあったら、大いに恵まれていると思わねばならない。あまり恵まれすぎているので、毎年二億石以上の木材を燃料としているというような、世界でも類例のないぜいたくをしている。

日本の産金額

年 度	年産(トン)
明治時代41年間平均	1.5
大正時代14年間平均	7.4
昭和時代9年間平均	22.9
昭和10年	28.5
昭和11年	34.2
昭和12年	40.9
戦争初期(昭和17年度)	約60.0

地下資源も、実は案外に多いのである。ただ、^③外国で発達した精錬法で、^{せうれんほう}経済的に取れるような鉱石が少いので、さしあたっては、資源がないのと同じ結果になっているだけのことである。

資源としては、ものの資源と同様に、エネルギーの資源も大切である。水力電気や石炭などがなかったら、ものの資源からものを取り出すことができない。ところが、このエネルギー資源のうちの一番大切なもの、すなわち水力電気は、水資源としてはまだまだたくさん未開発のままに残されている。調査済みの未開発水力だけでも一三〇〇万千瓦ワットあり、現在開発済みの電力の二倍以上ある。日本に降る雨と雪とを全部といわなくても半分利用すると、さらにその二倍以上もあるという調査もなされている。今わかっている一三〇〇万千瓦ワットの電力開発をしただけでも、日本の工業は飛躍的に^{ひやくてき}発達する。それで、日本の資源を開発しさえすれば、外国に迷惑^{めいわく}をかけないで、自力で国家の再建は可能であるといって決してまちがいではない。ただ、その開発にはいろいろな困難があるので、それを解決するには、科学の力をかりなければならぬ点が非常に多い。別のことばで言えば、^④科学の進歩によって再建は可能なのである。

地下資源というものは、掘ればそれだけなくなるものと一般^{いっぱん}に考えられている。そのとおりであるが、実際には地下資源の生産量が、年々が増している場合のほうが多い。金のようなものが一番わかりやすい。地下にある金などはきわめて限られたもので、^⑤どんどん掘ればまもなくなくなってしまいうように思われるであろう。しかし、日本の産金額を歴史的にみると、次の表のとおりである。

ただ、あまりにひどい貧^{ひん}乏^{ぼう}になると、精錬のための費用が製品の値段よりも高くなるので、経済的に成り立たない。それを、資源がないと言っているのである。それで、新しい精錬法が発見されれば、ないと思っていた資源が、実は案外にあったことになりうる。それで、科学によって資源を産み出すことができるのである。

そのわかりやすい例として、日本の鉄のことを考えてみよう。日本は鉄鉱石が著しく不足しているのが、大半輸入していることは前にいったとおりである。しかし、この鉄鉱石というのは、溶^{よう}鉱^{こう}炉^ろに入れて簡単に製鉄できるもの、すなわち、酸化鉄の鉱石という意味である。それが非常に少いことを、鉄鉱石が少いというのであって、鉄のはいった鉱石が日本にないというのではない。

鉄のはいった鉱石としては、硫^{いおう}黄^{おう}と化合した硫^{りゅう}化^ふ鉄^{てつ}鉱^{こう}というものがある。これならば日本には非常に豊富にあるので、スペインと並んで世界の第一位になっている。昭和十三年には年間二一二十万トンを生産し

て、世界の全生産高の二十パーセントを占めたこともある。埋蔵量は一億数千万トン以上といわれ、いわゆる鉄鉱石、すなわち酸化鉄鉱の埋蔵量約六〇〇万トンに比べて、けた違いに多い。それで、硫化鉄鉱を製鉄原料として使うことができれば、日本は一躍して鉄の大生産国になれるはずである。

硫化鉄鉱を燃やすと硫黄がとれるので、従来の日本ではこれを硫黄の原料としていた。硫黄は硫酸の原料で、ほかにも用途が広く、世界的にみても不足している貴重な元素である。これで、硫黄をとることはそれでよいのであるが、その残り、すなわち焼鉱は五十〜六十パーセントの鉄を含んでいる。これは現在、高い値段を払って輸入している優良な鉄鉱石と、ほとんど似た品位である。その焼鉱を今までは大部分捨てていたので、利用といっても埋め立てに使うくらいのことであつた。もっとも、製鉄所でも原料として少しは使っていたが、その量は全生産額の二十パーセントぐらいで、八十パーセントは現在でも捨てているのである。

そういうおかしきことをなぜするかというと、その焼鉱には銅がかなり含まれているからである。銅は製鉄には禁物であつて、これが少量でもはいると、鉄やがねの性質が非常に悪くなり、ひびがでやすくなる。それで、この焼鉱をある程度以上混ぜると、他の鉄鉱までだめになってしまうのである。製鉄の際に銅を除去することは従来不可能とされていたので、この大切な資源の大部分は、むなしく捨てられていたわけである。

それで、少し極端に言えば、製鉄・製鋼の際に銅を除去することができないということ、今まで日本には鉄資源がないといっていたのである。この分離ができるようになれば、銅も大切な元素であるから、鉄・硫黄・銅という大切なものばかりの化合物に、豊富に恵まれていることになる。すなわち、科学によって資源が産み出されるのである。

こういう例はほかにいくらかあるので、東北地方に多いいわゆる黒鉱などもその一つである。これは、金・銀・銅・鉛・亜鉛などの貴重金属と、硫化鉄とのまざつたものである。これも分離がむずかしいので、比較的銅分の多いものを銅の鉱石とし、鉛分に富むものを鉛鉱として、わずかに使っているだけである。銅鉱石として精錬する場合には、硫黄は大部分廃ガスとして空中に逃げ、煙害問題を起す。福が災となるのである。科学の力によって、この精錬法の改良ができれば、大切ないろいろな金属の資源が豊富に産まれてくることになる。

砂鉄の場合も同じことである。日本の砂鉄は、東北地方の海岸だけでも数千万トン、あるいは一億トン以上の埋蔵量といわれている。鉄分は三十六パーセント程度で、品位は低いが採掘は容易である。これも、チタンやバナジウムという珍しい元素がはいっているのので、製鉄原料としては不適當とされているが、チタンもバナジウムも、ジェット機のエンジンや、その他特殊の金属材料を作るのに必要な元素である。それで砂鉄を鉄ばかりでなく、それらの元素の鉱石と考えれば非常に大切な資源であり、それには日本は大いに恵まれているのである。

日本で一番乏しいとされている金属資源でも、このように考えてみると、資源そのものに乏しいのではなく、それを
が乏しいということになる。水資源・水産資源・森林資源など、恵まれている資源について、科学の力でさらにその開発を進めれ
ば、いつそうわれわれの生活を豊かにすることができるであろう。

(中谷 宇吉郎『科学と人生』KADOKAWA による)

注1 一二〇〇万石 Ⅱ 「石」は体積の単位、「一石」は一八〇リットル

注2 千円札 Ⅱ この文章が書かれた当時はまだ一万円札が発行されておらず、千円札が一番金額の高い紙幣だった

注3 今度の戦争 Ⅱ 一九四五年に終戦をむかえた、日本と諸外国との戦争

注4 元素 Ⅱ 物質を構成する基本的な成分

Ⅰ——線①「問題は、それだけの資源があるか否かに帰する」とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 他国を侵略して物資を持つてくることはさげたいから
- イ 日本には食糧や木材を購入するためのお金がないから
- ウ 国内で生産するものも、原料は外国から輸入するから
- エ 輸入するには、その対価となる輸出物資が必要だから
- オ 昭和初期から日本の本土では食糧が足りなかったから

2 ——線②「従来の考え方では、日本は資源に乏しい国ということになっていた」とありますが、これに対する筆者の考え方としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア 基本的な資源はあるが、エネルギー資源のうち一番大切な水力電気は、水資源としてまだ未開発のままの状態なので不足している。
- イ まるで国内の資源全体が見なされてしまっているけれども、実際は、水資源、水産資源、森林資源などに恵まれている。
- ウ 近代文明の基礎をなす鉄、石油、石炭などの資源や食糧が不足し、木材も年々減っていくという悲観的な状況から逃れることはできない。
- エ 鉄以外のいろいろな金属資源も、銅と亜鉛以外のものは著しく足りないため、大陸に進出しなければ人口をまかないきれずにいる。
- オ 資源には恵まれているが、毎年二億石以上の木材を燃料とするなど、類例のないぜいたくをして世界の森林資源の多くを食いつぶしている。

5 文章中の表「日本の産金額」を参考にして、⑤に入る文章としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 日本には資源がないと言われているが、初めはわずかだった金が年々比例的に増加し、産金額は着実に資源化している。資源を見つけたら、取らずに長い年月をかけて蓄積^{ちくき}していくのを待つことが大事なのである。

イ 地下にある金はきわめて限られたもので、どんどん掘れば産金額は減少していく。時代がたつごとに産金の技術を開発するための金額が増えて、費用の負担が増えてしまっているのである。

ウ 金は掘れば掘るほどたくさん出てくるような形にみえる。しかしこれは何も不思議な話ではなく、地下資源の埋蔵量のほうが、人間の採掘能力などと比べてけた違いに多いので、掘れば掘るほどたくさん出てくるのである。

エ 明治時代から大正時代、大正時代から昭和時代にかけては約七倍ずつ増えていた産金額が、時代を経るにつれて、前時代の二倍すら取れなくなっている。このようにして貧乏が増えていくのである。

オ 金は明治時代から戦争初期にかけて約四十倍の産金額となり、昭和十七年度には、地下資源の埋蔵量が限界に達してしまった。その後は、掘ることのできる金がまったくなくなってしまったのである。

6 —線⑥「焼鉱を今までは大部分捨てていた」とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 焼鉱をある程度以上混ぜると他の鉄鉱までだめにしてしまい、修復するための費用がかかりすぎるから

イ 全算出額の二十パーセントぐらいを製鉄所で使うほかは、埋め立て用として残しておく必要があったから

ウ 原料として日本の焼鉱から取れる鉄のかわりに、優良な品位の鉄鉱石を高い値段を払って海外から輸入しているから

エ 硫化鉄鉱を燃やすと硫黄がとれるので、日本ではこれを硫酸の原料として活用することができたから

オ 銅が鋼鉄に入ると性質を悪化させてしまうが、製鉄の際に銅を取り去る技術がなかったから

7 ⑦にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 資源化する科学 イ 発見する方法 ウ 再建する国力 エ 分離する技術 オ 輸出するシステム

(問題はこれで終わりです)

